

2 研究の実際

(3) 食育推進のための実態調査

ア 調査目的と方法

(7) 調査目的

県内の小・中・高等学校及び特別支援学校高等部における食育の取組状況や食育に対する教職員の意識について調査することで、学校における食育の現状や課題を明らかにし、今後の食育の在り方について検討する。

(イ) 実施期間

平成 29 年 9 月 25 日（月）～10 月 6 日（金）

(ロ) 調査対象校

県内の小・中・高等学校及び特別支援学校高等部（301 校）

(ハ) 調査対象者

調査対象校の家庭科教育担当主任及び栄養教諭、学校栄養職員（374 名）

※ 調査対象者は、調査対象校 301 校の家庭科教育担当主任及び 301 校中 73 校に配置されている栄養教諭、学校栄養職員（以後、栄養教諭等）とする。

(ニ) 調査内容

- a 食育の取組状況について
- b 校種間・教科間等の連携について
- c 児童生徒の食生活の課題について
- d 食育推進上の課題について

(ホ) 実施方法

エクセルファイルへの入力

【小学校家庭科主任用】

【中学校家庭科主任用】

【栄養教諭等用】

【高等学校家庭科主任用】

【特別支援学校高等部家庭科主任用】

(ヘ) 調査の実施及びデータ提出までの流れ

- a 各学校の家庭科主任及び栄養教諭等がエクセルファイルに入力する。
- b 学校で取りまとめて、SEI-Net の文書管理の回答機能を使って回答用紙（エクセルファイル）のみを添付し、回答する。

[食育実態調査【調査用紙および回答用紙】](#)

↑をクリックすれば、エクセルファイルが開きます。

イ 質問項目別集計

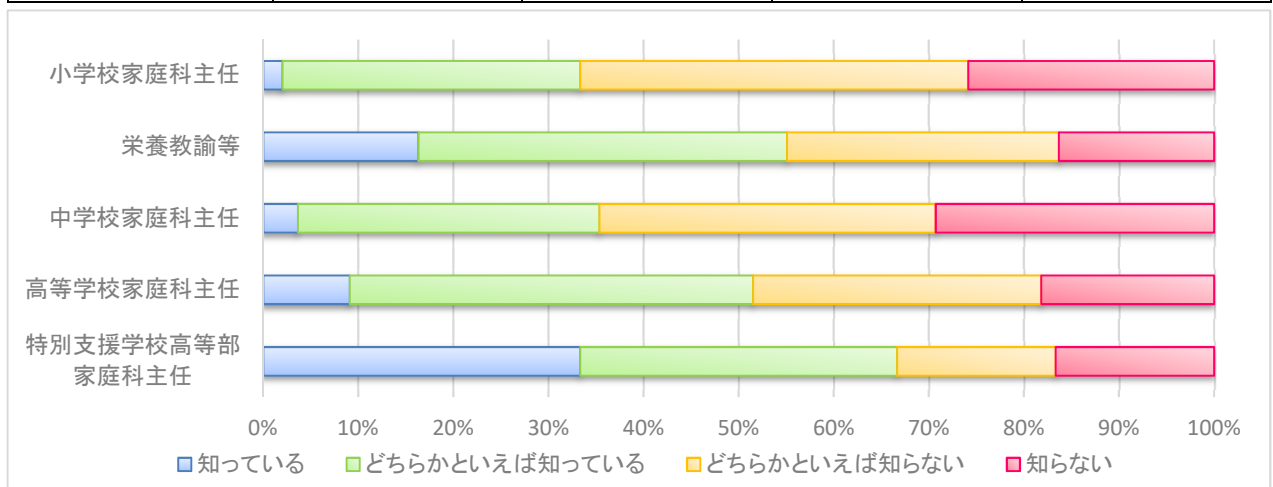
今回の実態調査では、佐賀県内の公立の全小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の家庭科教育担当主任及び栄養教諭等に調査を依頼し、374 名中 319 名からの回答を得ました。全体の有効回答率は 85.3%です。

調査対象者	延べ調査対象校数	調査対象者数	有効回答者数	有効回答率
小学校家庭科主任	162	162	148	91.4%
栄養教諭等	73	73	49	67.1%
中学校家庭科主任	87	87	83	95.4%
高等学校家庭科主任	43	43	33	76.7%
特別支援学校高等部家庭科主任	9	9	6	66.7%
計	374	374	319	85.3%

① 食育の取組状況について

(7) 幼稚園（保育園）の食育はどのような内容で行われているかを知っていますか。

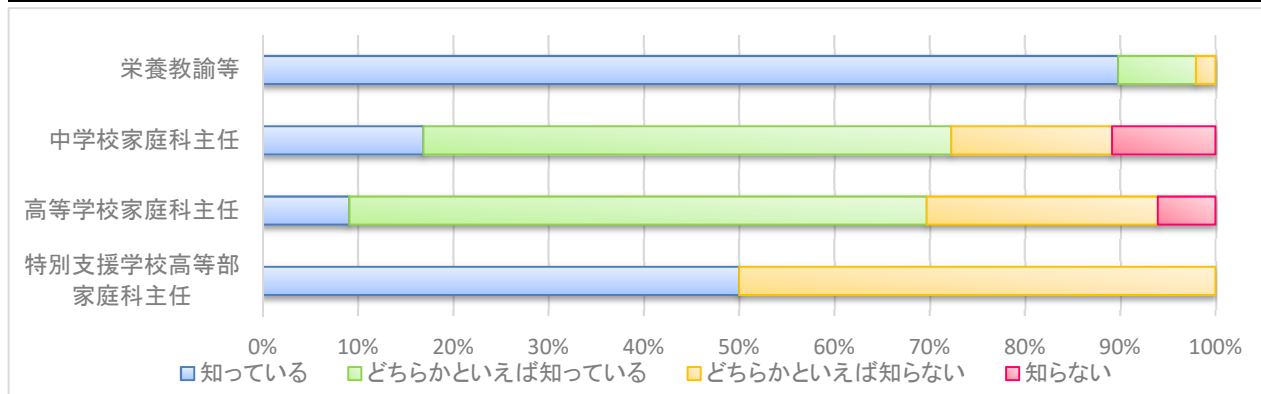
	知っている	どちらかといえば知っている	どちらかといえば知らない	知らない
小学校家庭科主任	3 (2.0%)	46 (31.1%)	60 (40.5%)	38 (25.7%)
栄養教諭等	8 (16.3%)	19 (38.8%)	14 (28.6%)	8 (16.3%)
中学校家庭科主任	3 (3.5%)	26 (30.6%)	29 (34.1%)	24 (28.2%)
高等学校家庭科主任	3 (9.1%)	14 (42.4%)	10 (30.3%)	6 (18.2%)
特別支援学校高等部家庭科主任	2 (33.3%)	2 (33.3%)	1 (16.7%)	1 (16.7%)



- ・ 幼保小連携は図られているが、食育に関する連携までには至っておらず、小学校家庭科主任においては、幼稚園（保育園）の食育の内容はあまり知られていない現状があると思われます。
- ・ 栄養教諭等においては、55.1%が「知っている」、「どちらかといえば知っている」と回答しています。

(イ) 小学校の食育はどのような内容で行われているかを知っていますか。

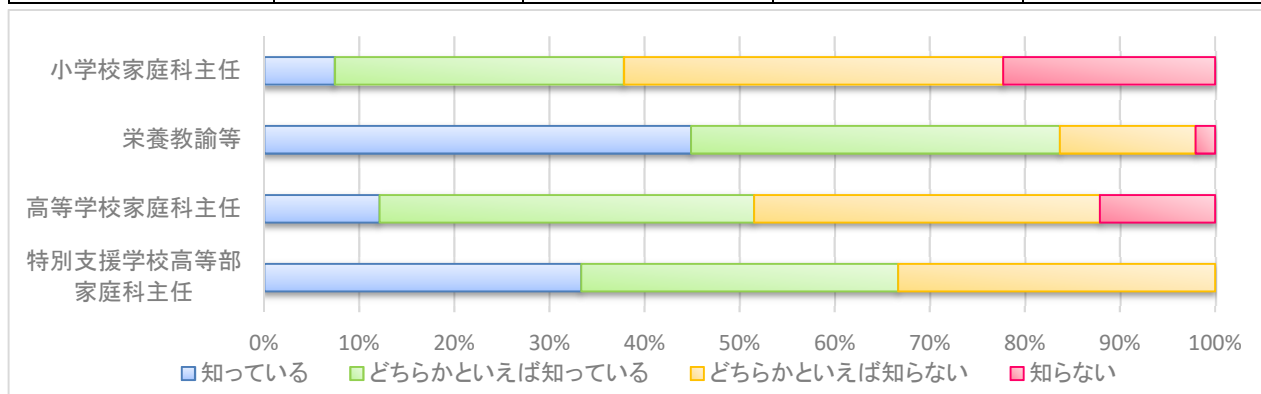
	知っている	どちらかといえば知っている	どちらかといえば知らない	知らない
栄養教諭等	44 (89.8%)	4 (8.2%)	1 (2.0%)	0 (0.0%)
中学校家庭科主任	14 (16.5%)	46 (54.1%)	14 (16.5%)	9 (10.6%)
高等学校家庭科主任	3 (9.1%)	20 (60.6%)	8 (24.2%)	2 (6.1%)
特別支援学校高等部家庭科主任	3 (50.0%)	0 (0.0%)	3 (50.0%)	0 (0.0%)



- ・ 小学校の食育に関しては、中学校家庭科主任、高等学校家庭科主任共に「知っている」、「どちらかといえば知っている」という回答が多いことが分かりました。

(ウ) 中学校の食育はどのような内容で行われているかを知っていますか。

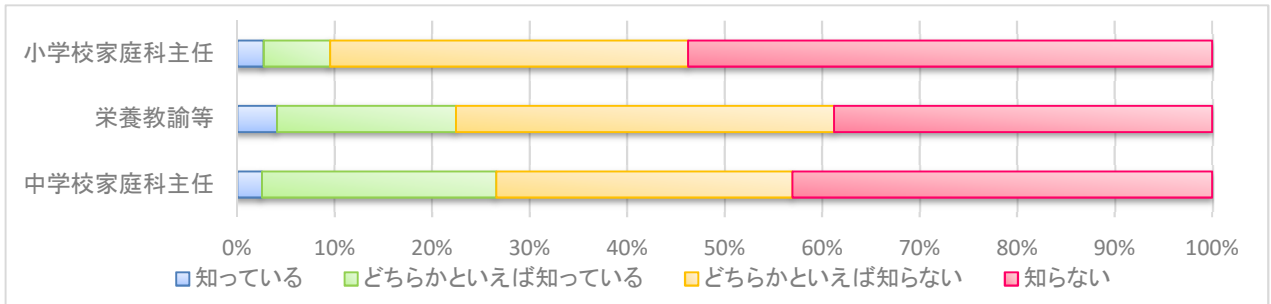
	知っている	どちらかといえば知っている	どちらかといえば知らない	知らない
小学校家庭科主任	11 (7.4%)	45 (30.4%)	59 (39.9%)	33 (22.3%)
栄養教諭等	22 (44.9%)	19 (38.8%)	7 (14.3%)	1 (2.0%)
高等学校家庭科主任	4 (12.1%)	13 (39.4%)	12 (36.4%)	4 (12.1%)
特別支援学校高等部家庭科主任	2 (33.3%)	2 (33.3%)	2 (33.3%)	0 (0.0%)



- ・ 中学校の食育に関しては、栄養教諭等以外は小学校の食育に比べて「知っている」、「どちらかといえば知っている」という回答が少ないことが分かりました。中高の校種間連携が少ないことと、小中連携実施校に関しても、家庭科を専門とする中学校家庭科主任が小学校の食育の内容を知っている状況とは違い、小学校家庭科主任が中学校の食育の内容を知るには至っていないと言えます。

(エ) 高等学校の食育はどのような内容で行われているかを知っていますか。

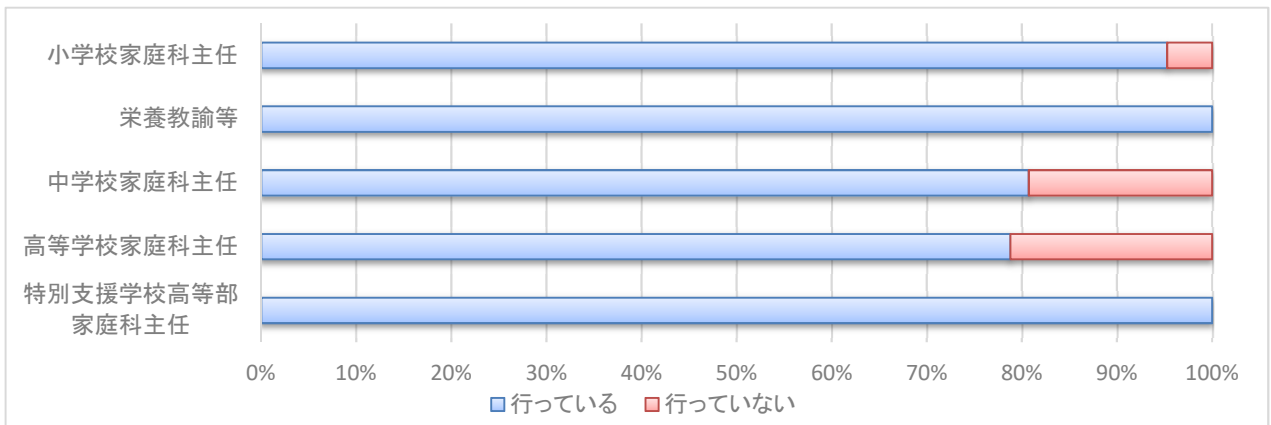
	知っている	どちらかといえば知っている	どちらかといえば知らない	知らない
小学校家庭科主任	4 (2.7%)	10 (6.8%)	54 (36.5%)	79 (53.4%)
栄養教諭等	2 (4.0%)	9 (18.4%)	19 (38.8%)	19 (38.8%)
中学校家庭科主任	2 (2.4%)	19 (22.4%)	24 (28.2%)	34 (40.0%)



- ・高等学校の食育に関しては、あまり知られていない状況が分かりました。
- ・前の学校段階の内容は知る機会がある一方、後の学校段階の内容については、知る機会が少ないと思われます。

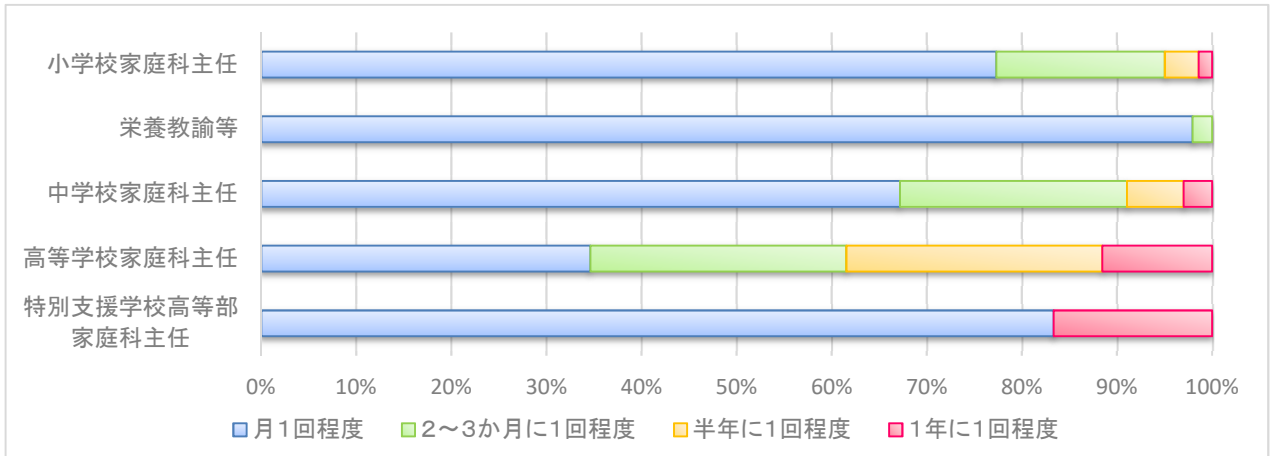
(オ) あなたの学校では、食育便り（学校便りや保健便りなどへの掲載も含む）で食育の啓発を行っていますか。

	行っている	行っていない
小学校家庭科主任	141 (95.3%)	7 (4.7%)
栄養教諭等	49 (100%)	0 (0.0%)
中学校家庭科主任	67 (78.8%)	16 (18.8%)
高等学校家庭科主任	26 (78.8%)	7 (21.2%)
特別支援学校高等部家庭科主任	6 (100%)	0 (0.0%)

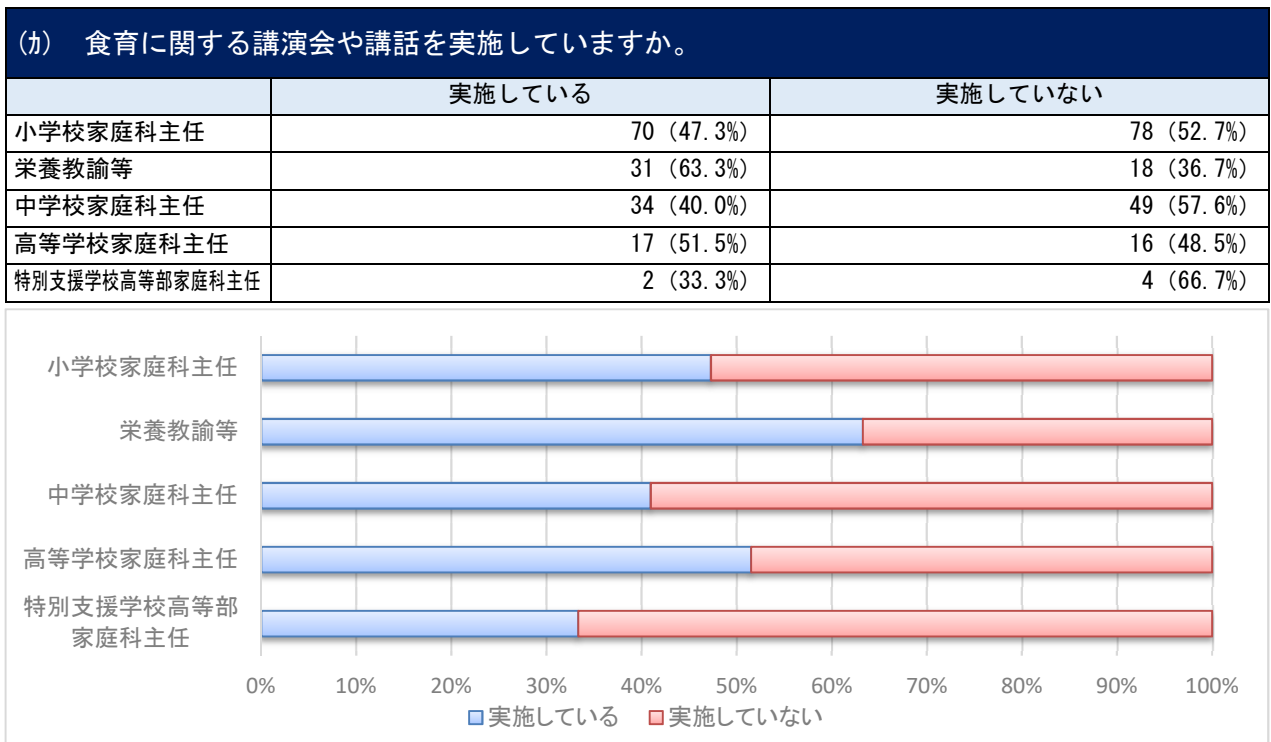


☆「ア 行っている」と答えた方は、どのくらいの頻度で行っていますか。

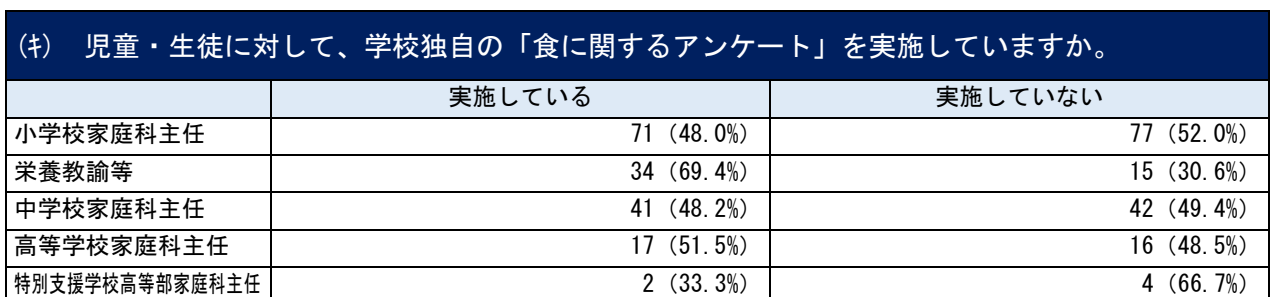
	月 1 回程度	2～3か月に 1 回程度	半年に 1 回程度	1 年に 1 回程度
小学校家庭科主任	109 (73.6%)	25 (16.9%)	5 (3.4%)	2 (1.4%)
栄養教諭等	48 (98.0%)	1 (2.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
中学校家庭科主任	45 (52.9%)	16 (18.8%)	4 (4.7%)	2 (2.4%)
高等学校家庭科主任	9 (27.3%)	7 (21.2%)	7 (21.2%)	3 (9.1%)
特別支援学校高等部家庭科主任	5 (83.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (16.7%)

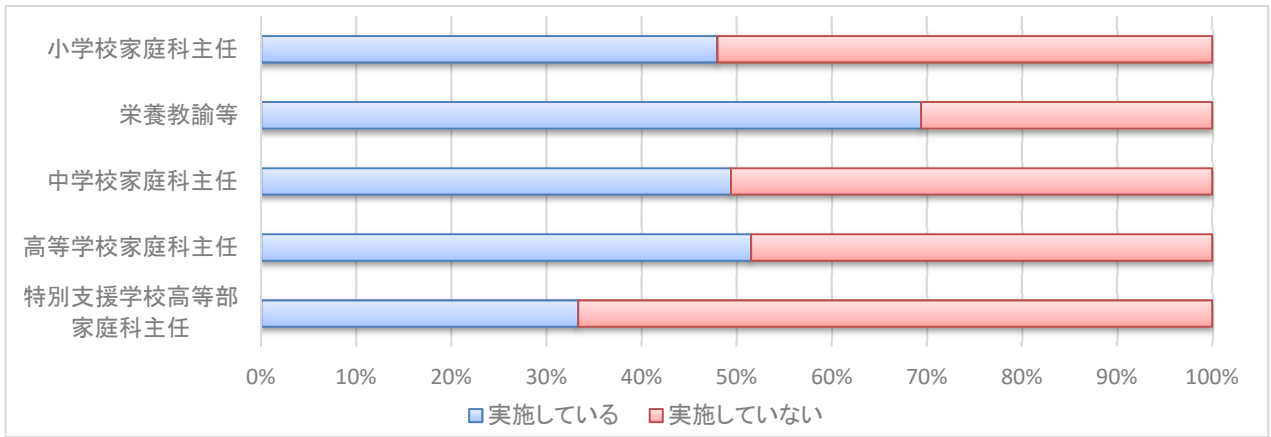


- ・ 食育便りで食育の啓発を行っている教員は、全校種にわたり多いことが分かりました。
- ・ 食育便りの頻度としては、「月1回程度」の回答が最も多く、特に小学校で多いことが分かりました。

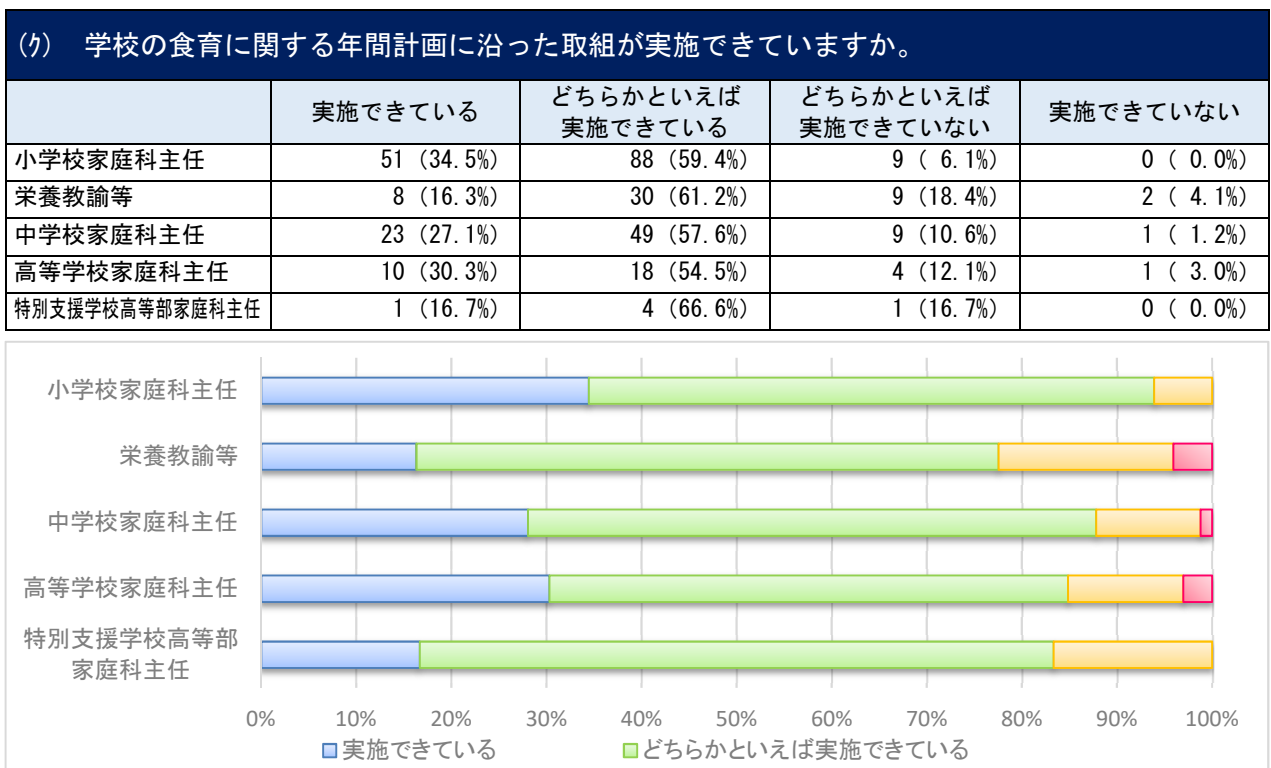


- ・ 食育に関する講演会や講話は、どの校種も約半数が実施していることが分かりました。
- ・ 栄養教諭等については、栄養教諭等自身が講話を行うことがあるため、63.3%と高い割合になっていると思われます。





・学校独自の「食に関するアンケート」を実施していると回答した教員は、小・中・高等学校共に約半数であることが分かりました。



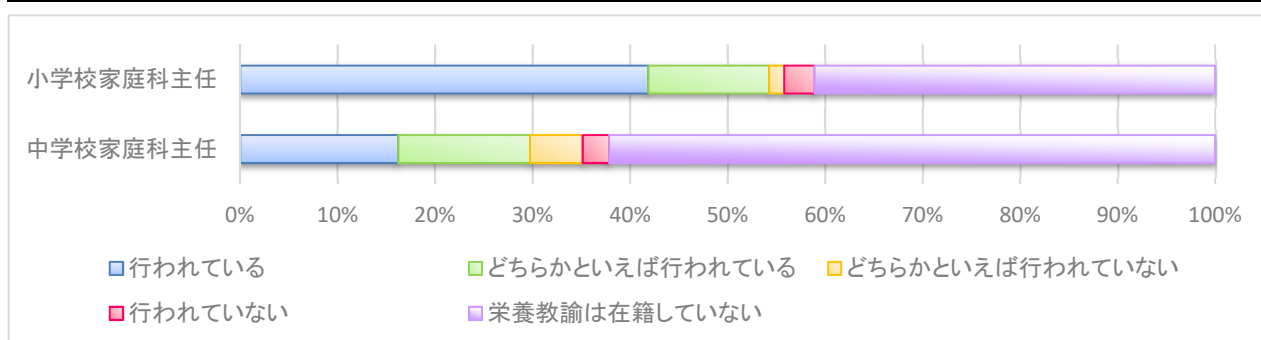
☆「ウ どちらかといえば実施できていない」、「エ 実施できていない」と答えた方は、その理由として考えられることをお書きください（記述式）。

	時間の確保が難しい	計画的に実施できていない	勤務態勢の問題	学校全体の取組になっていない	その他
小学校家庭科主任	4	2	1	1	0
栄養教諭等	1	7	1	1	0
中学校家庭科主任	2	1	1	3	2
高等学校家庭科主任	3	0	0	0	2
特別支援学校高等部家庭科主任	0	0	0	1	0

- ・どの校種においても、80%以上の教員が「実施できている」、「どちらかといえば実施できている」と回答しており、年間指導計画に沿った取組ができていることが分かりました。しかし、「どちらかといえば実施できていない」、「実施できていない」と回答した教員の理由を見ると、年間指導計画に沿った取組を全て行うのは厳しい状況ではないかと思われまます。
- ・「どちらかといえば実施できていない」、「実施できていない」理由は、「時間の確保が難しい」が約 39%、「学校内における食育についての認識不足」が約 27%であり、多忙な現状と学校内での食育に対する認識不足が影響していることが分かりました。

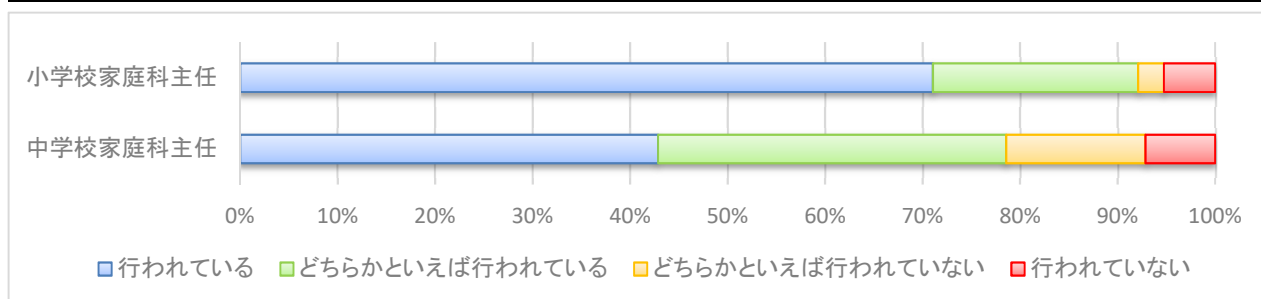
(ケ) 栄養教諭等が在籍している学校は、栄養教諭等による食に関する指導が行われていますか。
 ※「栄養教諭等が在籍している学校」とは、兼務校も含みます。

	行われている	どちらかといえば行われている	どちらかといえば行われていない	行われていない	栄養教諭は在籍していない
小学校家庭科主任	54 (36.9%)	16 (10.8%)	2 (1.4%)	4 (2.7%)	53 (35.8%)
中学校家庭科主任	12 (14.1%)	10 (11.8%)	4 (4.7%)	2 (2.4%)	46 (54.1%)



※栄養教諭等が在籍している学校の回答

	行われている	どちらかといえば行われている	どちらかといえば行われていない	行われていない
小学校家庭科主任	54 (71.1%)	16 (21.1%)	2 (2.6%)	4 (5.3%)
中学校家庭科主任	12 (42.9%)	10 (35.7%)	4 (14.3%)	2 (7.1%)

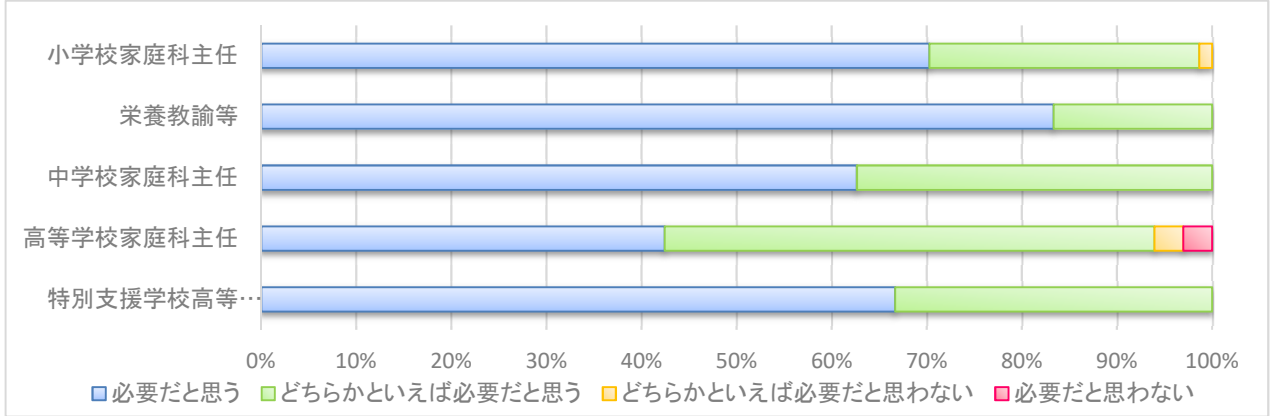


- ・小学校、中学校共に栄養教諭等による食に関する指導が行われている状況が分かりました。特に小学校家庭科主任においては、90%以上が「行われている」、「どちらかといえば行われている」と回答しています。
- ・小学校、中学校共に「行われていない」という回答がありますが、栄養教諭等が給食センター勤務など食に関する指導を行いつらい状況があるのではないかと思います。
- ・小学校で約 40%、中学校で約 60%の学校は、栄養教諭等が在籍していないため、栄養教諭等による食に関する指導が行われていない状況です。

②校種間・教科間等の連携について

(コ) 食育を行う際に、各教科等との連携は必要だと思いますか。

	必要だと思う	どちらかといえば必要だと思う	どちらかといえば必要だと思わない	必要だと思わない
小学校家庭科主任	104 (70.3%)	42 (28.4%)	2 (1.3%)	0 (0.0%)
栄養教諭等	40 (81.1%)	8 (16.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
中学校家庭科主任	52 (61.2%)	31 (36.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
高等学校家庭科主任	14 (42.5%)	17 (51.5%)	1 (3.0%)	1 (3.0%)
特別支援学校高等部家庭科主任	4 (66.7%)	2 (33.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

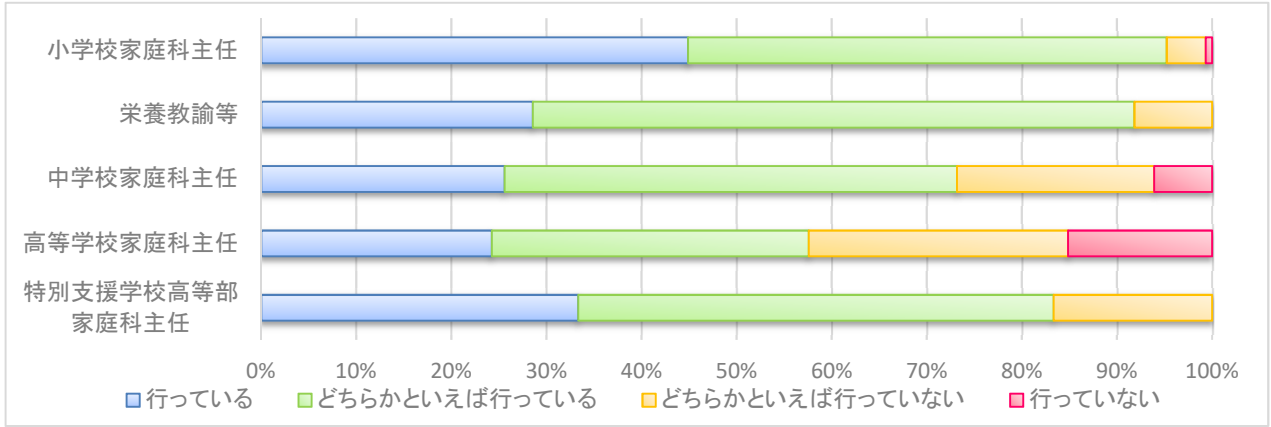


・「必要だと思う」、「どちらかといえば必要だと思う」という回答が、栄養教諭等、中学校家庭科主任、特別支援学校高等部家庭科主任においては 100%、小学校家庭科主任で 98.7%、高等学校家庭科主任で 94.0%であり、各教科との連携が必要だと考えている教員がほとんどであることが分かりました。

(ケ) 食育を行う際に、各教科等と連携（関連）させて行っていますか。

☆「ア 行っている」、「イ どちらかといえば行っている」と答えた方は、どの教科・領域と連携（関連）させて行っていますか。あてはまるものを全て選んでください。

	行っている	どちらかといえば行っている	どちらかといえば行っていない	行っていない
小学校家庭科主任	66 (44.6%)	74 (50.0%)	6 (4.1%)	1 (0.7%)
栄養教諭等	14 (28.6%)	31 (63.3%)	4 (8.2%)	0 (0.0%)
中学校家庭科主任	21 (24.7%)	39 (45.9%)	17 (20.0%)	5 (5.9%)
高等学校家庭科主任	8 (24.2%)	11 (33.3%)	9 (27.3%)	5 (15.2%)
特別支援学校高等部家庭科主任	2 (33.3%)	3 (50.0%)	1 (16.7%)	0 (0.0%)



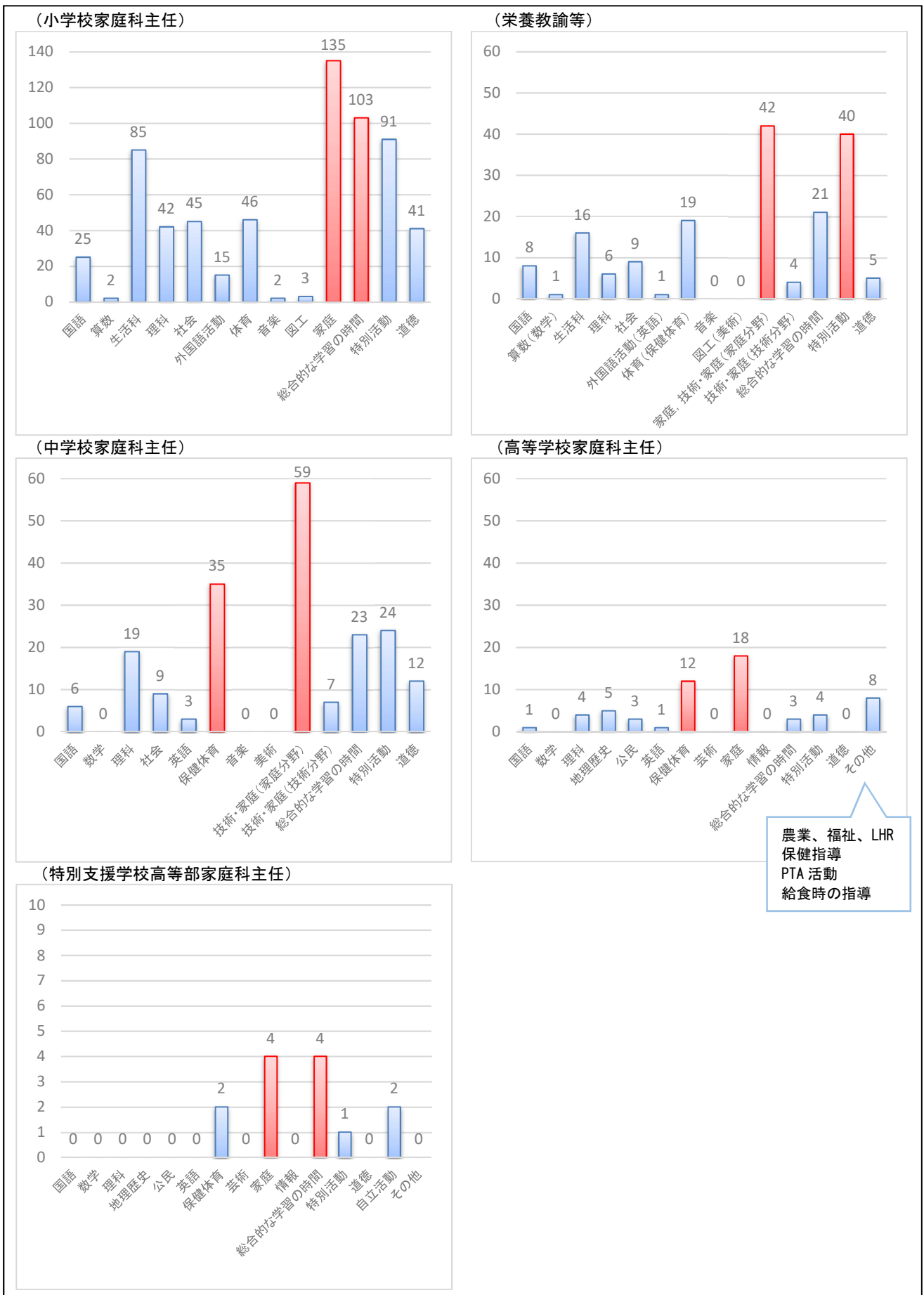
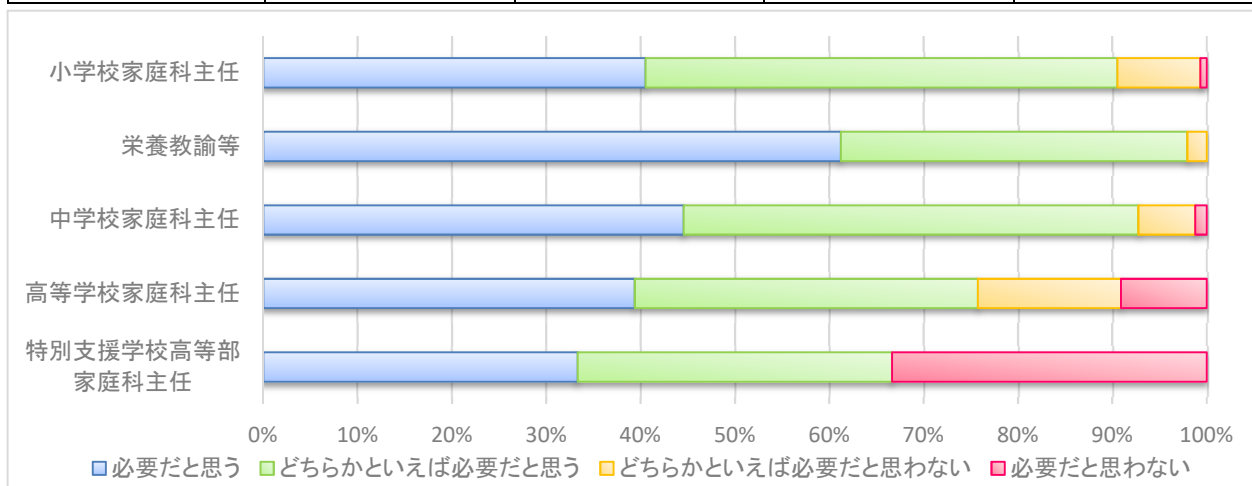


図 1 食育を行う際に連携（関連）させている教科・領域

- ・校種が上がるにつれて、連携を行っていない（行えていない）状況であることが分かりました。
- ・中学校、高等学校では、教科担任制になるため、各教科と連携させて行いく現状があるのではないかと思います。
- ・全校種において、家庭科、技術・家庭科家庭分野と連携して行っている教員が最も多い結果でした。
- ・小学校家庭科主任においては、家庭科の次に総合的な学習の時間、特別活動との連携が多く、1、2年生では、生活科との連携が多いのが特徴でした。
- ・栄養教諭等においては、家庭科の次に特別活動との連携が多くなっていますが、学校給食が特別活動に位置付けられていることも一つの要因と思われます。
- ・中学校家庭科主任、高等学校家庭科主任においては、保健体育科との連携が多くなっています。特に保健の健康等の内容との連携が多くなるのではないかと思います。
- ・高等学校では、各学校の設定科目や専門教科との連携が増えることが分かりました。
- ・特別支援学校高等部家庭科主任においては、自立活動と連携を行っていることが分かりました。

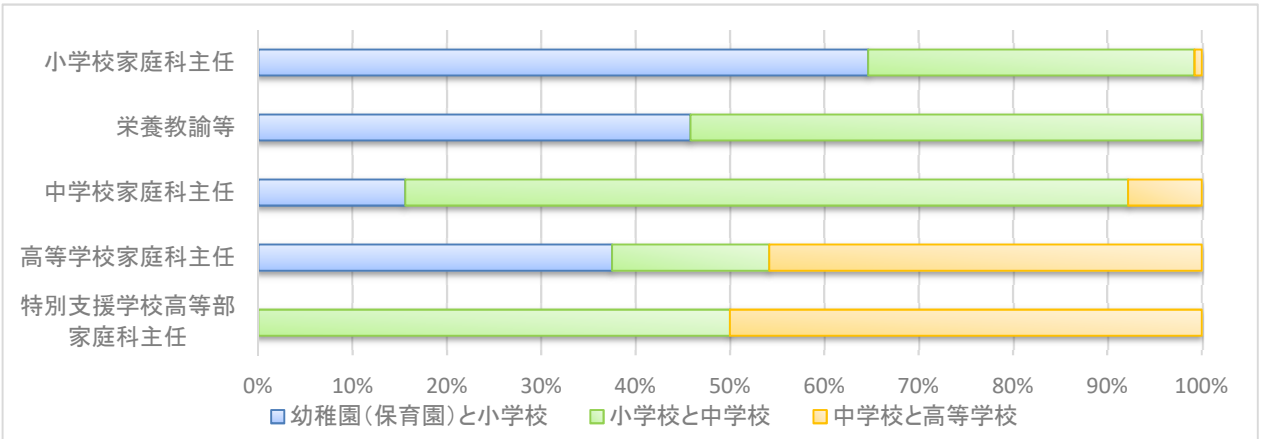
(シ) 食育を推進する際に、校種間の連携は必要だと思いますか。

	必要だと思う	どちらかといえば必要だと思う	どちらかといえば必要だと思わない	必要だと思わない
小学校家庭科主任	60 (40.5%)	74 (50.0%)	13 (8.8%)	1 (0.7%)
栄養教諭等	30 (61.2%)	18 (36.7%)	1 (2.0%)	0 (0.0%)
中学校家庭科主任	37 (43.5%)	40 (47.1%)	5 (5.9%)	1 (1.2%)
高等学校家庭科主任	13 (39.4%)	12 (36.4%)	5 (15.2%)	3 (9.1%)
特別支援学校高等部家庭科主任	2 (33.3%)	2 (33.3%)	0 (0.0%)	2 (33.3%)



☆「ア 必要だと思う」、「イ どちらかといえば必要だと思う」と答えた方は、特にどの段階での連携が必要だと思いますか。最もあてはまるものを1つ選んでください。

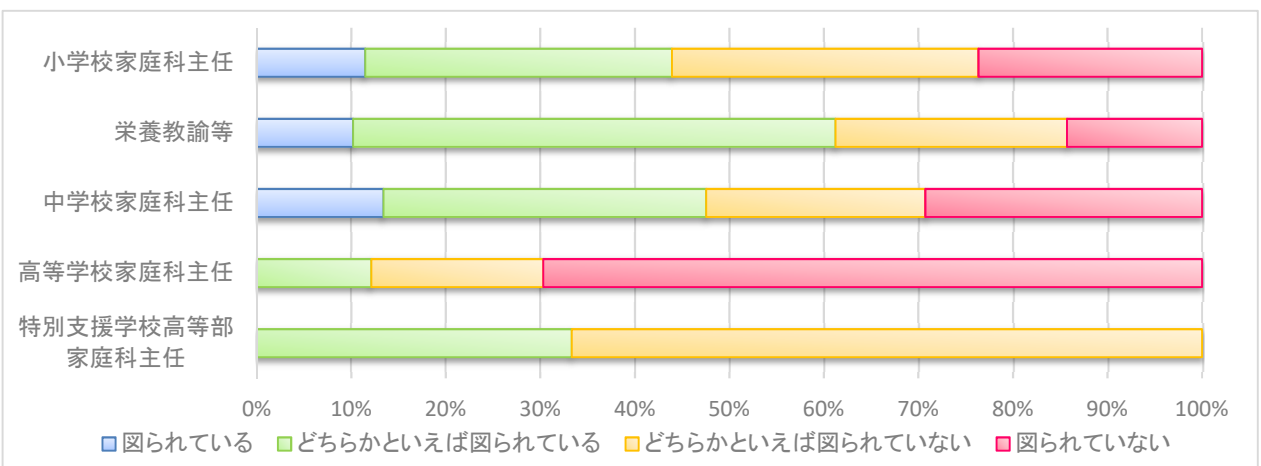
	幼稚園（保育園）と小学校	小学校と中学校	中学校と高等学校
小学校家庭科主任	86 (64.2%)	46 (34.3%)	1 (0.7%)
栄養教諭等	22 (45.8%)	26 (54.2%)	0 (0.0%)
中学校家庭科主任	12 (15.6%)	59 (76.6%)	6 (7.8%)
高等学校家庭科主任	9 (36.0%)	4 (16.0%)	11 (44.0%)
特別支援学校高等部家庭科主任	0 (0.0%)	2 (50.0%)	2 (50.0%)



- ・教科間の連携に比べ、校種間の連携に関しては必要だと思わない割合が少し増える結果となっていますが、多くの教員が校種間の連携にも必要性を感じていることが分かりました。
- ・「どの段階での連携が必要だと思いますか」という質問に関しては、各校種家庭科主任の回答を見ると、例えば高等学校では中学校と、中学校では小学校と、というように前段階との校種間連携が必要であるという回答が多いことが分かりました。

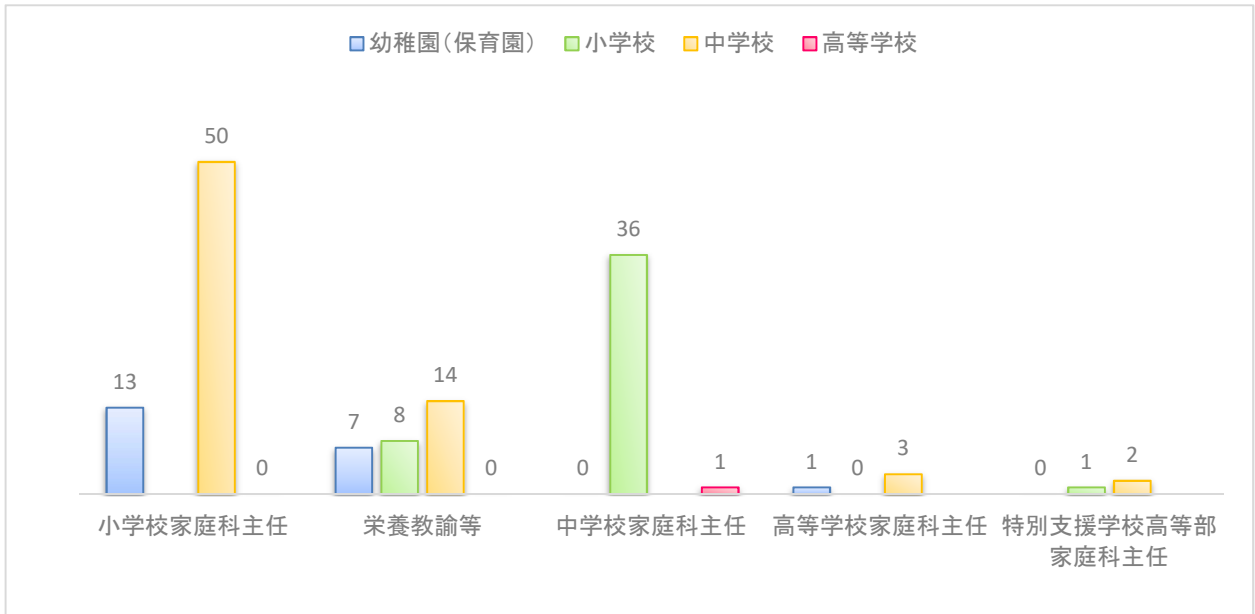
(ス) 食育を推進する際に、校種間の連携が図られていますか。

	図られている	どちらかといえば図られている	どちらかといえば図られていない	図られていない
小学校家庭科主任	17 (11.5%)	48 (32.4%)	48 (32.4%)	35 (23.6%)
栄養教諭等	5 (10.2%)	25 (51.0%)	12 (24.5%)	7 (14.3%)
中学校家庭科主任	11 (12.9%)	28 (32.9%)	19 (22.4%)	24 (28.2%)
高等学校家庭科主任	0 (0.0%)	4 (12.1%)	6 (18.2%)	23 (69.7%)
特別支援学校高等部家庭科主任	0 (0.0%)	2 (33.3%)	4 (66.7%)	0 (0.0%)



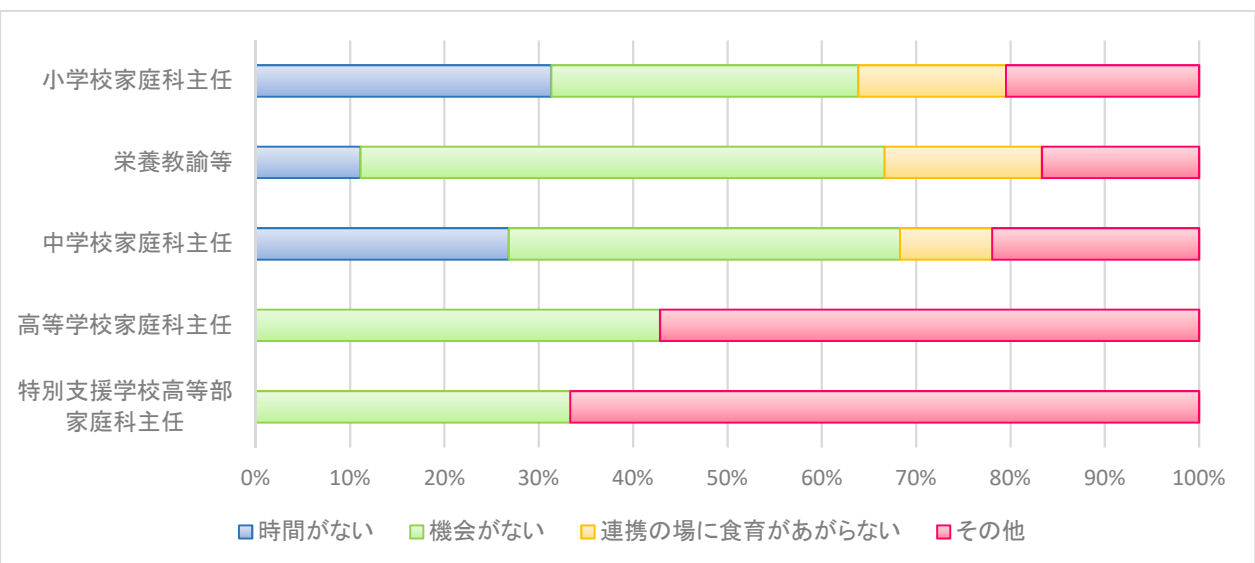
☆「ア 図られている」、「イ どちらかといえば図られている」と答えた方は、どの校種との連携が図られていますか。最もあてはまるものを1つ選んでください。

	幼稚園（保育園）	小学校	中学校	高等学校
小学校家庭科主任	13 (20.0%)		50 (76.9%)	0 (0.0%)
栄養教諭等	7 (23.3%)	8 (26.7%)	14 (46.7%)	0 (0.0%)
中学校家庭科主任	0 (0.0%)	36 (92.3%)		1 (2.6%)
高等学校家庭科主任	1 (25.0%)	0 (0.0%)	3 (75.0%)	
特別支援学校高等部家庭科主任	0 (0.0%)	1 (50.0%)	1 (50.0%)	



☆「ウ どちらかといえば図られていない」、「エ 図られていない」と答えた方は、その理由として考えられることをお書きください（記述式）。

	時間がない	機会がない	連携の場に食育があがらない	その他
小学校家庭科主任	26 (31.3%)	27 (32.5%)	13 (15.7%)	17 (20.5%)
栄養教諭等	2 (11.1%)	10 (55.6%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)
中学校家庭科主任	11 (26.8%)	17 (41.5%)	4 (9.8%)	9 (22.0%)
高等学校家庭科主任	0 (0.0%)	12 (42.9%)	0 (0.0%)	16 (57.1%)
特別支援学校高等部家庭科主任	0 (0.0%)	1 (33.3%)	0 (0.0%)	2 (66.7%)

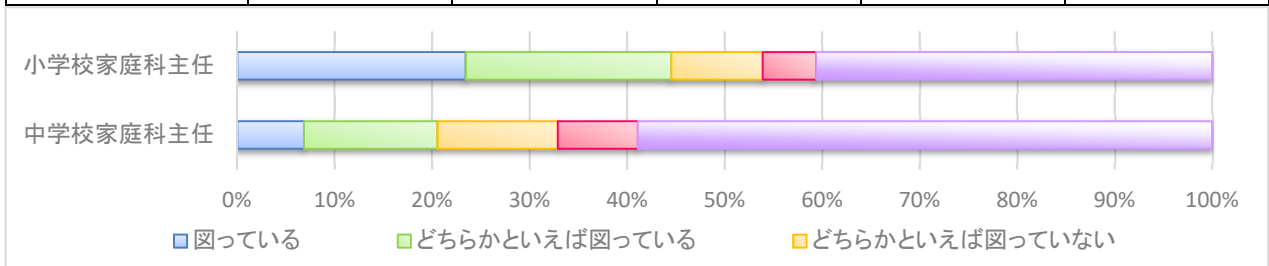


- ・小学校と中学校の校種間連携が多いことが分かりました。
- ・校種間連携について、必要性は感じているものの実際には連携が難しい状況であることが分かりました。
- ・小学校家庭科主任、中学校家庭科主任においては、約 50%が校種間の連携が「図られている」、「どちらかといえば図られている」と回答していますが、高等学校家庭科主任においては、87.9%が「どちらかといえば図られていない」、「図られていない」と回答しており、校種間の連携はほとんど図られていないことが分かりました。
- ・校種間の連携が図られていない主な理由としては、「時間がない」、「機会がない」が多く、多忙な現状と連携を図るための取組を行いにくい現状があることが分かりました。
- ・「その他」の記述から、小学校、中学校においては、生徒指導や中 1 ギャップの解消等の目的で、各教科等での小中連携が行われていますが、「食育」が連携の対象になっていない現状も分かりました。
- ・「その他」の記述から、高等学校においては、多数の中学校から入学してくるため、中学校との校種間連携を実現させるには難しい状況にあることが分かりました。
- ・「その他」の記述から、特別支援学校においては、校種間連携よりも、各生徒の実態に応じた指導が優先されていることが分かりました。

(七) 栄養教諭等が在籍している学校は、家庭科の指導をする上で栄養教諭等との連携を図っていますか。

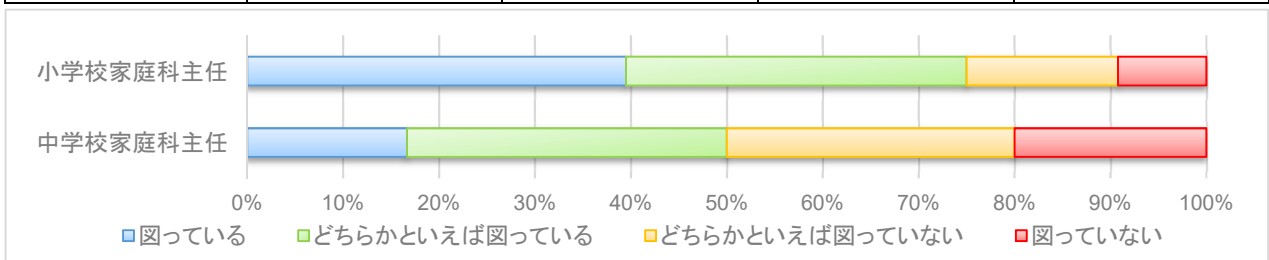
※「栄養教諭等が在籍している学校」とは、兼務校も含みます。

	図っている	どちらかといえば図っている	どちらかといえば図っていない	図っていない	栄養教諭は在籍していない
小学校家庭科主任	30 (20.3%)	27 (18.2%)	12 (8.1%)	7 (4.7%)	53 (35.8%)
中学校家庭科主任	5 (5.9%)	10 (11.8%)	9 (10.6%)	6 (7.1%)	43 (50.6%)



※栄養教諭等が在籍している学校の回答

	図っている	どちらかといえば図っている	どちらかといえば図っていない	図っていない
小学校家庭科主任	30 (39.5%)	27 (35.5%)	12 (15.8%)	7 (9.2%)
中学校家庭科主任	5 (16.7%)	10 (33.3%)	9 (30.0%)	6 (20.0%)

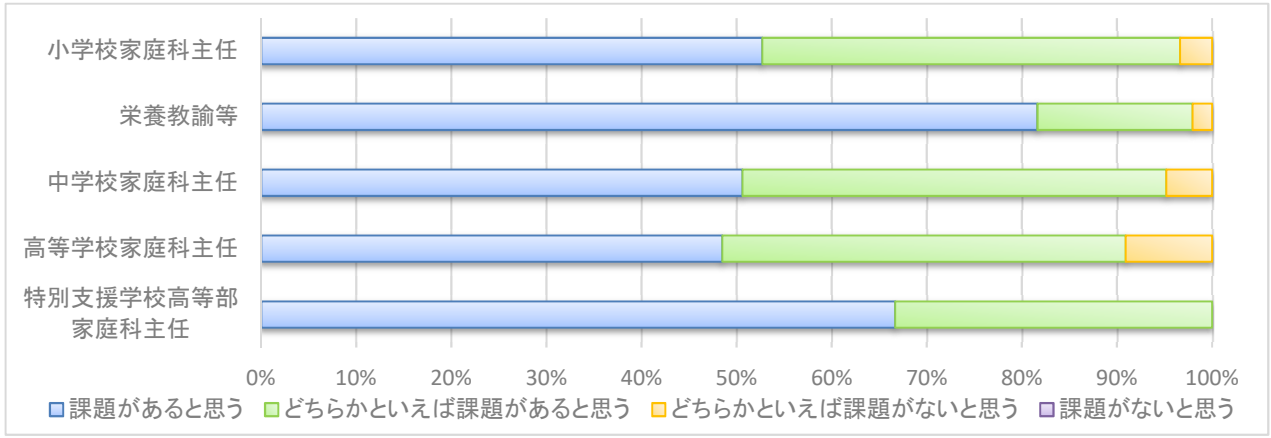


- ・栄養教諭等が在籍している学校では、家庭科の指導をする上で、栄養教諭等との連携を「図っている」、「どちらかといえば図っている」と回答した教員は、小学校で 75.0%と高く、中学校では 50.0%でした。

③ 児童・生徒の食生活の課題について

(7) 児童・生徒の現在の食生活には課題があると思いますか。

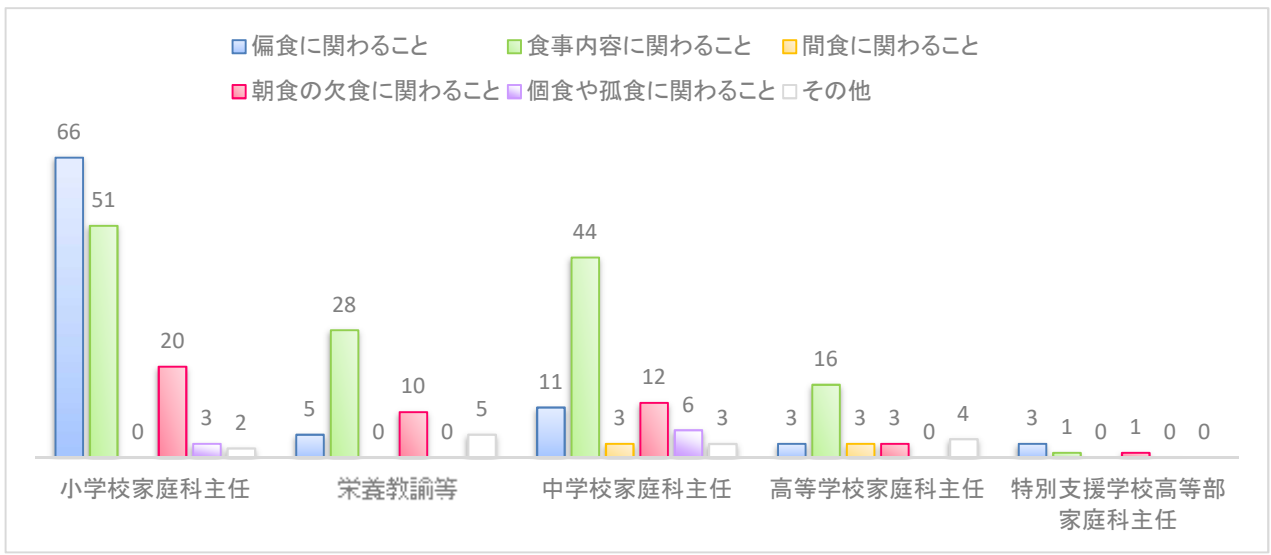
	課題があると思う	どちらかといえば課題があると思う	どちらかといえば課題がないと思う	課題がないと思う
小学校家庭科主任	78 (52.7%)	65 (43.9%)	5 (3.4%)	0 (0.0%)
栄養教諭等	40 (81.6%)	8 (16.3%)	1 (2.0%)	0 (0.0%)
中学校家庭科主任	42 (49.4%)	37 (43.5%)	4 (4.7%)	0 (0.0%)
高等学校家庭科主任	16 (48.5%)	14 (42.4%)	3 (9.1%)	0 (0.0%)
特別支援学校高等部家庭科主任	4 (66.7%)	2 (33.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)



・どの校種においても、90%以上が、児童・生徒の現在の食生活に課題が「ある」、「どちらかといえばある」と回答しました。

☆「ア 課題があると思う」、「イ どちらかといえば課題があると思う」と答えた方は、特にどのようなことに課題があると思いますか。最もあてはまるものを1つ選んでください。

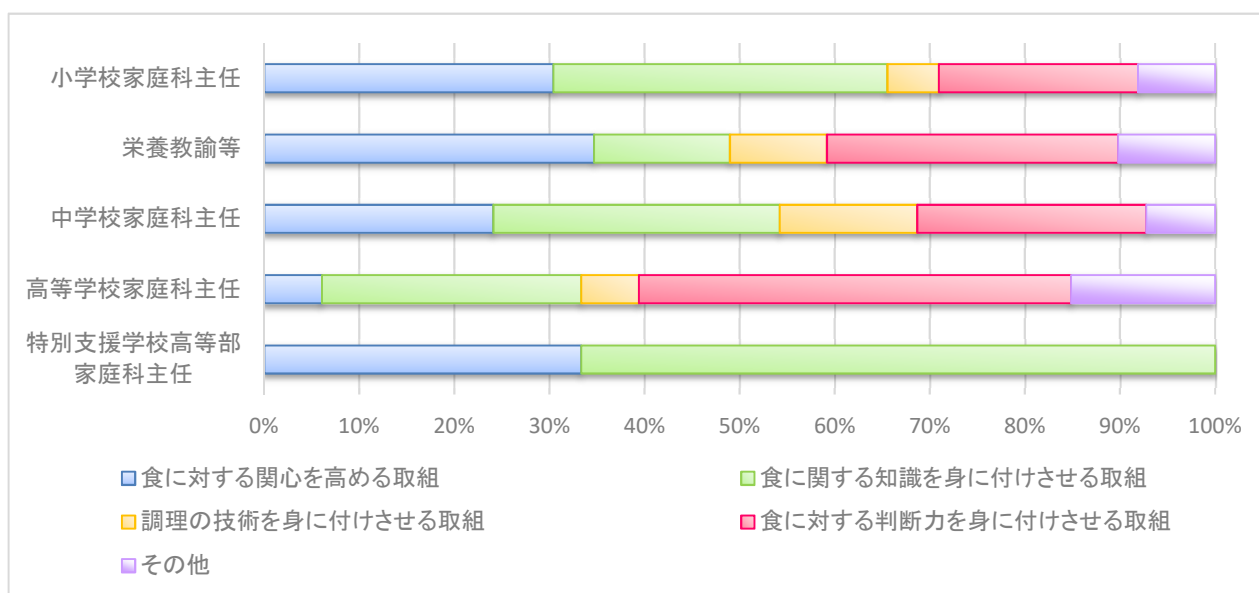
	偏食に関わること	食事内容に関わること	間食に関わること	朝食の欠食に関わること	個食や孤食に関わること	その他
小学校家庭科主任	66 (46.2%)	51 (35.7%)	0 (0.0%)	20 (14.0%)	3 (2.1%)	2 (1.4%)
栄養教諭等	5 (10.4%)	28 (58.3%)	0 (0.0%)	10 (20.8%)	0 (0.0%)	5 (10.5%)
中学校家庭科主任	11 (13.9%)	44 (55.7%)	3 (3.8%)	12 (15.2%)	6 (7.6%)	3 (3.8%)
高等学校家庭科主任	3 (10.0%)	16 (53.3%)	3 (10.0%)	3 (10.0%)	0 (0.0%)	4 (13.3%)
特別支援学校高等部家庭科主任	3 (50.0%)	1 (16.7%)	0 (0.0%)	1 (16.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)



- ・小学校家庭科主任においては、46.2%が「偏食に関わること」に課題があると回答しました。
- ・全校種において「食事内容に関わること」に課題があると回答した教員が多いことが分かりました。
- ・「その他」として、「全ての項目に課題がある」、「家庭による格差が大きい」、「調理をする機会が少ない」などの課題が自由記述において明らかになりました。

(㍻) 児童・生徒の食生活の課題を解決するために、必要な取組は何だと思えますか。最もあてはまるものを1つ選んでください。

	食に対する関心を高める取組	食に関する知識を身に付けさせる取組	調理の技術を身に付けさせる取組	食に対する判断力を身に付けさせる取組	その他
小学校家庭科主任	45 (30.4%)	52 (35.1%)	8 (5.4%)	31 (20.9%)	12 (8.1%)
栄養教諭等	17 (34.5%)	7 (14.3%)	5 (10.2%)	15 (30.6%)	5 (10.2%)
中学校家庭科主任	20 (23.5%)	25 (29.4%)	12 (14.1%)	20 (23.5%)	6 (7.2%)
高等学校家庭科主任	2 (6.1%)	9 (27.3%)	2 (6.1%)	15 (45.5%)	5 (15.2%)
特別支援学校高等部家庭科主任	2 (33.3%)	4 (66.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

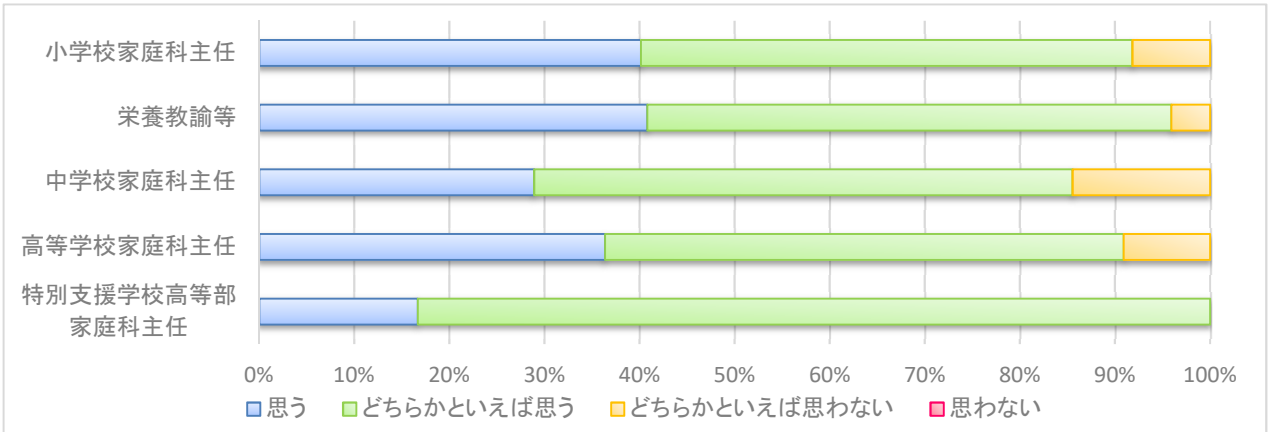


- ・小・中・高等学校と学年が進むにつれて、「食に対する関心を高める取組」、「食に関する知識を身に付けさせる取組」の回答が減り、「食に対する判断力を身に付けさせる取組」の回答割合が増えています。
- ・高校生は小中学生に比べると物を選択する機会が増えることから、高等学校家庭科主任においては、「食に対する判断力を身に付けさせる取組」の回答が約50%を占めており、「食を選ぶ力」の育成が必要だと思われることが分かりました。
- ・その他、必要な取組としては、全校種において「保護者への啓発」という回答がほとんどでした。

④ 食育推進上の課題について

(フ) 学校で行う食育の指導が、児童・生徒の望ましい食習慣の確立や食に関する実践力の向上につながっていると思いますか。

	思う	どちらかといえば 思う	どちらかといえば 思わない	思わない
小学校家庭科主任	59 (39.9%)	76 (51.4%)	12 (8.1%)	0 (0.0%)
栄養教諭等	20 (40.8%)	27 (55.1%)	2 (4.1%)	0 (0.0%)
中学校家庭科主任	24 (28.3%)	47 (55.3%)	12 (14.1%)	0 (0.0%)
高等学校家庭科主任	12 (36.4%)	18 (54.5%)	3 (9.1%)	0 (0.0%)
特別支援学校高等部家庭科主任	1 (16.7%)	5 (83.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

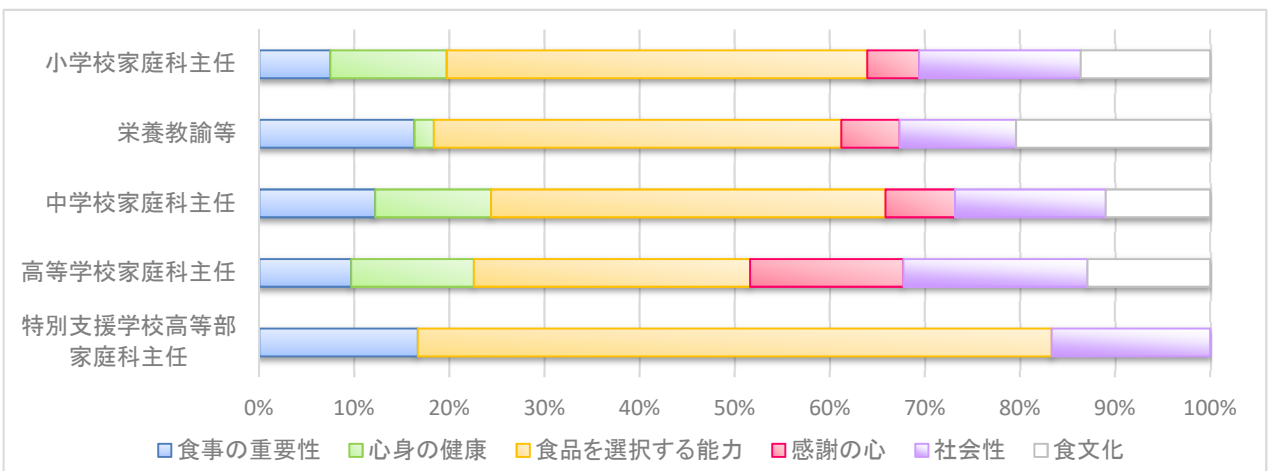


・学校で行う食育が、児童・生徒の望ましい食習慣の確立や食に関する実践力の向上につながっていると回答している教員がほとんどでした。

(ツ) 食育を行う際に、指導するのが難しいと思う項目はどれですか。最もあてはまるものを1つ選んでください。

※6つの選択項目は、平成22年3月に文部科学省から出された「食に関する指導の手引き」の学校における食育の6つの視点と同じです。

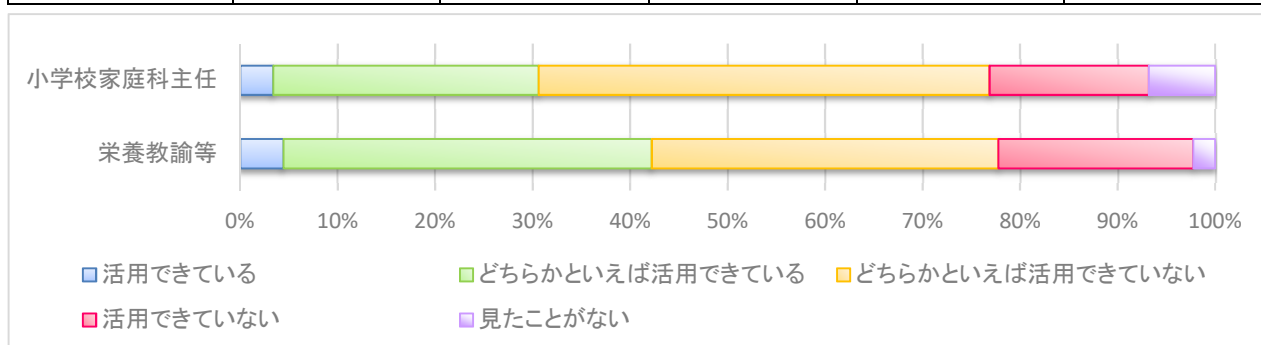
	食事の重要性	心身の健康	食品を選択する能力	感謝の心	社会性	食文化
小学校家庭科主任	11 (7.4%)	18 (12.2%)	65 (43.9%)	8 (5.4%)	25 (16.9%)	20 (13.5%)
栄養教諭等	8 (16.3%)	1 (2.0%)	21 (42.9%)	3 (6.1%)	6 (12.2%)	10 (20.4%)
中学校家庭科主任	10 (11.8%)	10 (11.8%)	34 (40.0%)	6 (7.1%)	13 (15.3%)	9 (10.6%)
高等学校家庭科主任	3 (9.1%)	4 (12.1%)	9 (27.3%)	5 (15.2%)	6 (18.2%)	4 (12.1%)
特別支援学校高等部家庭科主任	1 (16.7%)	0 (0.0%)	4 (66.7%)	0 (0.0%)	1 (16.7%)	0 (0.0%)



- ・ 全校種において、「食品を選択する能力」の項目を指導するのが難しいという回答が一番多く、高等学校家庭科主任を除いて、40%以上を占めています。
- ・ 栄養教諭等に関しては、「食品を選択する能力」の次に「食文化」の項目を指導するのが難しいとする回答が多くありました。

(7) 文部科学省から配布された小学生用食育教材「たのしい食事つながる食育」は活用できていますか。

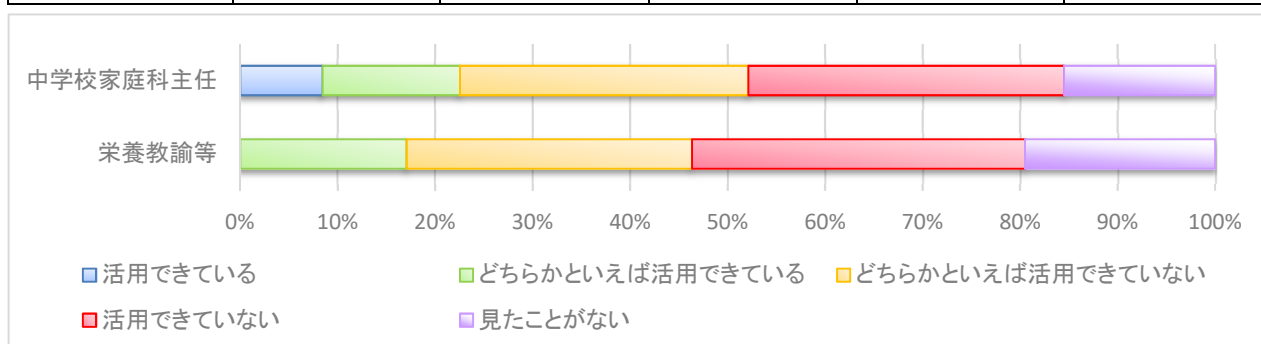
	活用できている	どちらかといえば活用できている	どちらかといえば活用できていない	活用できていない	見たことがない
小学校家庭科主任	5 (3.4%)	40 (27.0%)	68 (45.9%)	24 (16.2%)	10 (6.8%)
栄養教諭等	2 (4.1%)	17 (34.7%)	16 (32.7%)	9 (18.4%)	1 (2.0%)



- ・ 小学生用食育教材「楽しい食育つながる食育」については、小学校家庭科主任で約 30%、栄養教諭等で約 40%が「活用できている」、「どちらかといえば活用できている」と回答しており、あまり活用できていない現状が分かりました。

(8) 文部科学省から配布された食生活学習教材（中学生用）は活用できていますか。

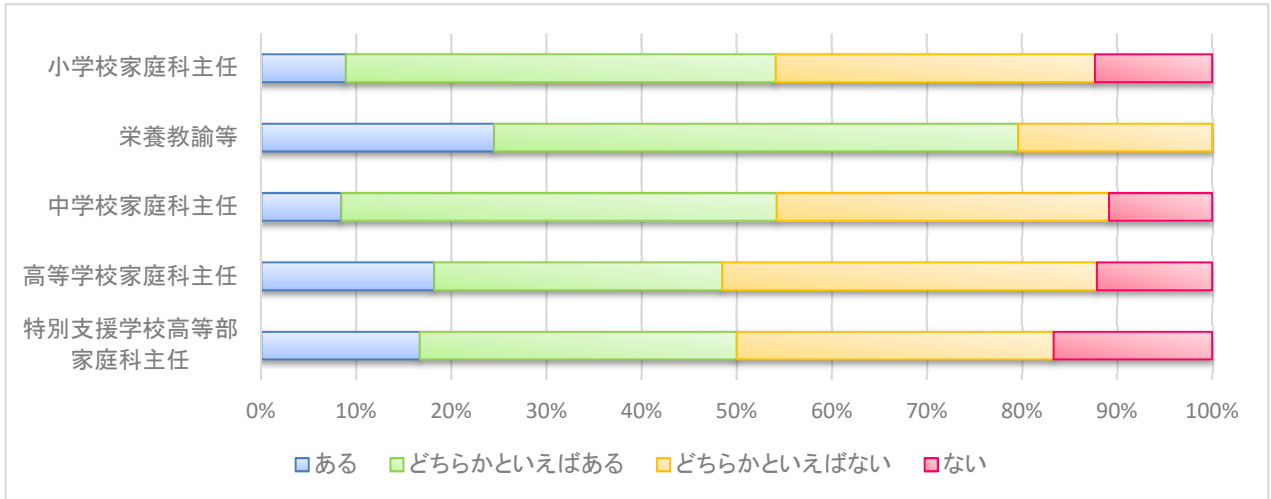
	活用できている	どちらかといえば活用できている	どちらかといえば活用できていない	活用できていない	見たことがない
中学校家庭科主任	6 (7.1%)	10 (11.8%)	21 (24.7%)	23 (27.1%)	11 (12.9%)
栄養教諭等	0 (0.0%)	7 (14.3%)	12 (24.5%)	14 (28.6%)	8 (16.3%)



- ・ 食生活学習教材（中学生用）の活用については、「活用できている」、「どちらかといえば活用できている」教員は 20%弱にとどまっており、小学生用の教材と比べ「見たことがない」という回答も目立ちました。

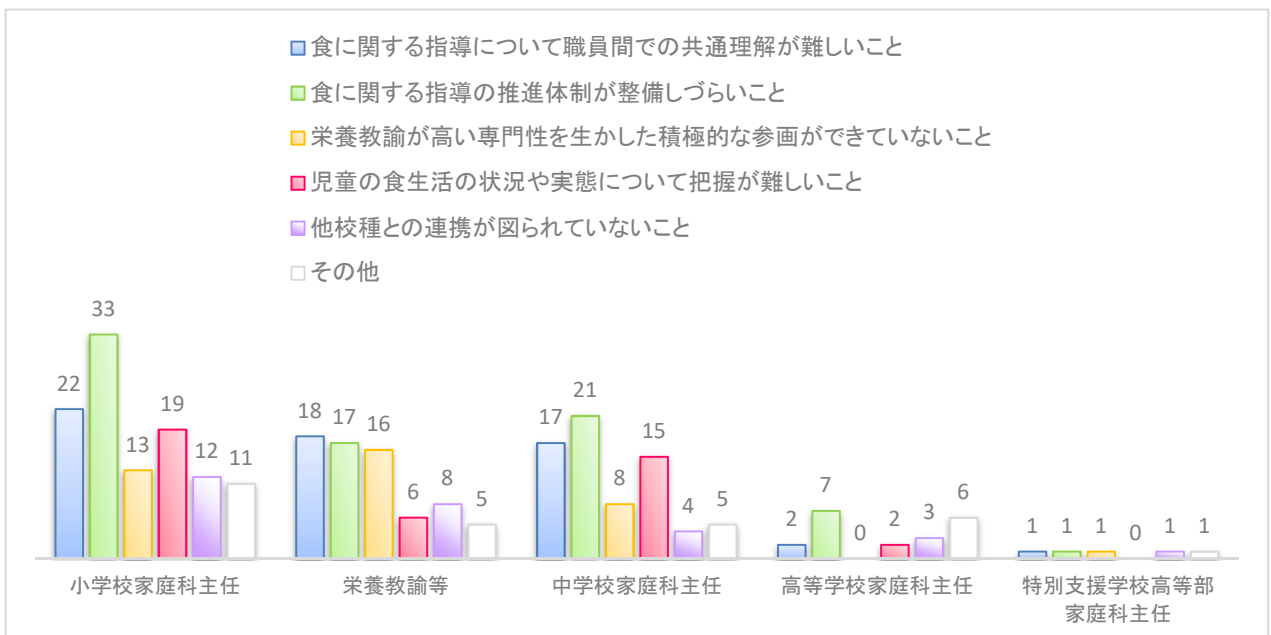
(ナ) 校内で食育を推進していく上で、困っていることはありますか。

	ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
小学校家庭科主任	13 (8.8%)	66 (44.6%)	49 (33.1%)	18 (12.2%)
栄養教諭等	12 (24.5%)	27 (55.1%)	10 (20.4%)	0 (0.0%)
中学校家庭科主任	7 (8.2%)	38 (44.7%)	29 (34.1%)	9 (10.6%)
高等学校家庭科主任	6 (18.2%)	10 (30.3%)	13 (39.4%)	4 (12.1%)
特別支援学校高等部家庭科主任	1 (16.7%)	2 (33.3%)	2 (33.3%)	1 (16.7%)



☆「ア ある」、「イ どちらかといえばある」と答えた方は、どのようなことについて困っていますか。あてはまるものを全て選んでください。

	食に関する指導について職員間での共通理解が難しいこと	食に関する指導の推進体制が整備しづらいこと	栄養教諭が高い専門性を生かした積極的な参画ができていないこと	児童の食生活の状況や実態について把握が難しいこと	他校種との連携が図られていないこと	その他
小学校家庭科主任	22 (14.9%)	33 (22.3%)	13 (8.8%)	19 (12.8%)	12 (8.1%)	11 (7.4%)
栄養教諭等	18 (36.7%)	17 (34.7%)	16 (32.6%)	6 (12.4%)	8 (16.3%)	5 (10.2%)
中学校家庭科主任	17 (20.0%)	21 (24.7%)	8 (9.4%)	15 (17.6%)	4 (4.7%)	5 (6.0%)
高等学校家庭科主任	2 (6.1%)	7 (21.2%)	0 (0.0%)	2 (6.1%)	3 (9.1%)	6 (18.2%)
特別支援学校高等部家庭科主任	1 (16.7%)	1 (16.7%)	1 (16.7%)	0 (0.0%)	1 (16.7%)	1 (16.7%)



☆「その他」の記述

	時間の確保	家庭との連携	職員の理解	児童・生徒の意識	その他
小学校家庭科主任	3	8	0	0	0
栄養教諭等	2	1	1	0	1
中学校家庭科主任	0	2	0	0	3
高等学校家庭科主任	3	0	2	1	0
特別支援学校高等部家庭科主任	0	0	0	1	0

- ・ 校内で食育を推進していく上で、困っていることが「ある」、「どちらかといえばある」と回答した教員は、どの校種も約半数でした。
- ・ 栄養教諭等においては、「ある」、「どちらかといえばある」の回答が約 80%で、「職員間での共通理解が難しい」、「推進体制が整備しづらい」、「積極的な参画ができていない」という 3 点についての困り感が大きいことが分かりました。
- ・ いずれの校種においても、職員間の理解や推進体制の整備に関する内容について、困っている状況があることが分かりました。
- ・ 学校で食に関する指導を行っても、児童生徒の家庭状況が様々であり、実践や習慣付けることが難しいという意見がありました。
- ・ 小・中・高等学校ともに、家庭科、技術・家庭科の授業時間数が少ない中で、食育に時間を充てるのが難しいという意見がありました。
- ・ 高等学校においては、「食育は家庭科が行うもの」と認識されている現状があることが、自由記述により明らかになりました。

ウ 考察

実態調査の結果から、県内の小・中・高等学校及び特別支援学校高等部における食育の取組状況、食育推進上の課題等について、以下のように分析しました。

(7) 各調査内容について

a 食育の取組状況について

年間指導計画に沿った食育の取組、栄養教諭等による食に関する指導は、75%以上の高い割合で実施されています。

年間指導計画に沿った食育の取組は、どの校種においても 80%以上の教員が実施できていると回答していました。しかし、栄養教諭等においては、「計画的に実施できていない」という理由で実施できていないという回答が 20%を超えていました。

栄養教諭等による食に関する指導は、小・中学校ともによく行われており、栄養教諭等が在籍している小学校の 90%以上、中学校の 75%以上で行われています。

また、食育に関する講演会や講話の実施率は約 50%でしたが、食育便り（学校便りや保健便りなどへの掲載も含む）については、校種を問わず 75%以上が実施していることが分かりました。一方で、食育の取組内容については、校種によって知っているかどうかの差が開きがありました。

b 校種間・教科間等の連携について

各教科等との連携については、小・中・高等学校と校種が上がるにつれて連携させている割合が減っています。全校種において、「家庭科、技術・家庭科」との連携が最も多い結果でした。また、校種間連携については必要性が感じられながらも困難な状況にあります。

実際に食育を行う際に各教科等と連携させて行っている教員は、小学校家庭科主任で約 95%、中学校家庭科主任で約 70%、高等学校家庭科主任で約 55%、栄養教諭等で約 90%でした。小・中・高等学校の学習指導要領の家庭科、技術・家庭科には、教科の特質に応じて、食育の充実を図る旨の記述があります。このことから、学校の食育を考える上で、家庭科、技術・家庭科との連携は欠かせないものがあると言えます。実際に小学校家庭科主任で約 96%、中学校家庭科主任で約 98%、高等学校家庭科主任で約 72%、栄養教諭等で約 88%が家庭科、技術・家庭科と食育を連携させて行っています。

校種間の連携については、連携を図っている教員は、小学校家庭科主任、中学校家庭科主任で 45%前後、栄養教諭等で約 60%、高等学校家庭科主任においては 12%であり、教科・領域との連携と比べて、校種間連携の難しさが明らかになりました。

c 児童・生徒の食生活の課題について

児童・生徒の食生活については課題が多く、学校段階が進むにつれて「食に対する判断力を身に付けさせる取組」が必要という回答の割合が増えています。また、食育を行う際に、指導するのが最も難しい項目は、「食品を選択する能力」でした。

全ての校種において 90%以上の教員が、現在の児童・生徒の食生活に課題があると回答しています。課題を解決するために必要な取組については、「食に関する関心を高める取組」、「食に関する知識を身に付けさせる取組」という回答が多くありましたが、学校段階が進むにつれて「食に対する判断力を身に付けさせる取組」への回答が増えていました。また、「食品を選択する能力」の項目を指導するのが最も難しいという回答が全ての校種において多くの割合を占めていました。

d 食育推進上の課題について

校内で食育を推進していく上では、栄養教諭等の困り感が大きくなっています。

校内で食育を推進していく上で困っていることが「ある」、「どちらかといえばある」と回答した教員は全ての校種において約 50%、栄養教諭等においては約 80%でした。困っている内容については、「指導の推進体制が整備しづらいこと」、「職員間での共通理解が難しいこと」が多く、その他、「家庭との連携」で困っているという記述が多くありました。

家庭科主任からは、校種を問わず「児童・生徒の家庭状況が様々であり、実践や習慣付けることが難しい」という意見や、「家庭科、技術・家庭科の授業時間数が少ない中で、食育に時間を充てるのが難しい」、「食育は家庭科、技術・家庭科が行うものと認識されている」などの意見がありました。

(イ) 実態調査のまとめ

- 食育の取組については、各学校で年間指導計画に沿って行われています。しかし、小学校で約 40%、中学校で約 60%の学校は、栄養教諭等が在籍していないため、栄養教諭等による食に関する指導を行うのは難しい状況にあります。栄養教諭等が在籍していない小・中学校や高等学校では、食育において家庭科担当教員が担う役割は大きいと考えます。
- 家庭科・技術・家庭科を基軸としながら、食育と各教科・領域との連携につなげていくことができると考えます。小学校では第 5 学年から家庭科を学習します。食育と各教科・領域との連携は、第 5 学年からの家庭科につなぐ意味でも必要不可欠です。さらに、小・中学校においては、教科・領域との連携を図るときに、学校給食を教材として活用することが有効であることから、栄養教諭等との連携を強化することも重要だと考えます。
- 児童生徒の食生活における課題を解決するためには、発達段階に応じて、食に関する知識を身に付けさせ、興味・関心を高めて、食を選ぶ力を育成していく必要があると言えます。また、食育を行う際に、「食品を選択する能力」の項目を指導するのが最も難しいと回答した教員が多い結果だったことから、食を選ぶ力を育成するための食に関する指導を充実させていく必要があると考えます。
- 各学校における食育の位置付けや推進体制の違いが、職員間、教科間、校種間の連携に大きく影響を与えることが分かりました。すでに連携が図られている学校等を参考に、各学校において食育をどのように位置付け、どことどのように連携を図っていくかが大きな課題と言えます。